

Ⅲ 第一部 講演

② 『障害学生の入学前指導から入学後の修学支援について

— 山口大学の事例を中心に —

山口大学 大学教育センター

教授 小川 勤

今ご紹介いただきました山口大学の大学教育センターに所属しております小川と申します。20分ほど、山口大学の事例の紹介をしたいと思います。

今、JASSOの方から、国全体の障害の支援の様子の話があったと思いますが、私は少し山口大学に限ってお話をしたいと思います。といいましても、実は山口大学は広島大学のアクセシビリティセンターにかなりいろいろご指導願って、それに従っているいろんなことをやっておりますので、この後、広島大学の山本先生から広島大学の事例紹介があると思いますので少しかぶるかもしれませんが、一応山口大学としてはこういうことをやっているのだという話を聞いていただければと思います。

今回の発表については、これまでどういうふうに取り組んできたのか。それから障害学生に対する受験から前期終了までの修学支援の流れ。この中には受験を控えているという方もいらっしゃるし、2年後ぐらいに山口大学を受けてみたいという方がいるかもしれませんが、そういう方には参考になると思いますが、山口大学を受けようと思った場合に、どういうふうに対応しているのかという話です。それと、現在の修学支援の組織。それから、さらに学生を受け入れるために先生方、教職員等がどのような研修をやっているのか。それを少し見ていただきたいと思います。最後に、現状の課題と今後の展望についてお話ししたいと思います。

まず初めに、平成19年度に、ここに赤く書いてありますが、「山口大学における修学に障害のある学生の支援に関する基本方針」、以下、基本方針と言わせてもらいますが、基本方針というものを初めて作りました。それからまだ3年間くらいしか経っていないので、広島大学さんに比べると山口大学の場合、障害学生支援の歴史は非常に浅いとい

うこととなります。18年度以前は、はっきり言いまして、各学部がそれぞれ対応していたということで、全学的に対応したということはやっておりませんでした。

これが基本方針です。ただ単純に1から4まで書いてあるだけなのですが、非常に漠然としたことしか書いてありませんけれども、実はこういうこと自体が山口大学にはなかったというわけです。全学的に平成19年2月13日に教育研究協議会という教育研究の一番中心的な委員会なのですが、そこで承認されたことになっております。

内容はここに書いてあるとおりですので一々お話ししませんが、当たり前と言えば当たり前のことが書かれてあります。例えば1番では、「山口大学は、自主自立の精神、自己決定権、プライバシーの尊重の視点から、障害のある学生本人の意思を尊重して修学上の支援を行う」。2番、「山口大学は、障害のある学生及び修学を支援する者と連携して、修学上の環境と支援体制を整備する」。3番、「山口大学は、障害のある学生の支援を通して、学生サービスの充実、教育方法の改善など、大学の教育活動の向上を図る」、というようなことを初めて宣言したわけです。

この結果として、どんなことが起こったかということですが、ここからが19年度の2月以降の話になります。今言ったように、2月13日に基本方針が制定されまして、その後、それと符丁するというのはちょっと不思議なのですが、これ以降急に、障害を持つ学生さんの受験生が非常に増えてきました。確かな数は覚えていないのですが、それまでは、1人とか2人とかしか把握していなかったのですが、急に7、8人受験を希望する障害学生が増加してきました。別にこれを宣言したから増えたというわけではないのですが、たまたまというか、あるいはそういうものを知っていた保護者の方がいたということもあるかもしれませんが、そういう関係で非常に増えてきました。

それと同時に、先生方に対して障害学生を受け入れるということはどういうことなのかということを理解していただくために、ここに教務手帳と書いてありますが、先生方に持っていただく、簡単にいうと教務関係のマニュアル本みたいなものですが、障害学生がもし先生の担当される授業の中にいた場合、どういうふうに対応していったらいいかということを書いた簡単なパンフレットですが、そういうものを教務手帳の中に追加

記入しました。これはもともと愛媛大学にありましたハンドブックを参照させていただきました。それと同時に、広島大学のアクセシビリティセンターのほうに私と大学教育センター長が出向きまして、それまでは障害学生支援をどういうふうにやったらいいか全くわかりませんでしたので、そこでその方法とか、授業保障というのは一体どうやってやるのかということについて調査研究を行いました。これが19年3月です。ですから、2月に基本方針が決まってから1カ月か2カ月の間にバタバタといろいろなことをやろうということになりました。受験生も増えてきたので、その受験生の中の何人かは受かるだろうという想定のもとにやっていったわけです。

結果として、配布資料に新聞の切り抜きが入っていますが、二川君という重度の聴覚障害を持った学生が山口大学の農学部獣医学科を受験しに来ました(52頁参照)。獣医というのは人気があるのですが、彼はその獣医学科の現在3年生です。彼が重度というのはどの程度か。100デシベルというのは皆さんわかりますか。100デシベルというのはほとんど聞こえないということで、彼はFM補聴器というのを耳につけて、先生にピンマイクをつけてもらって、そこで先生がしゃべることをFM補聴器で聞き取るという形で、高校時代はそのようにして授業を受けて、受験をして、山口大学はかなり難しい、健常の人たちが受験しても非常に難しいのですが、獣医学科に晴れて合格して入ってきました。ちなみに彼は1年浪人しています。1年浪人して、2年目に入ってきたということです。この記事は古いのですが、参考になりますので、また後で見ただければと思います。

彼が入ってきた関係で、広島大学にお聞きしまして、二川君の授業を担当する先生方にFD研修を行いまして、二川君の授業をやるときにどういう点に配慮したらいいか、そのやり方の研修を行いました。

それと同時に、8月、ちょうど今ごろでしたが、障害学生支援に関する講演会、これは後で写真をお見せしますが、ワークショップ、パネルディスカッションを、先進校である筑波技術大学の先生方にも来ていただいて、全国の障害学生の支援の様子や聴覚障害の学生にどういうふうに授業保障をしたらいいのかということについてお話をしてもら

いました。

その後、年が改まって、20年2月からは、彼がいずれ専門教育に行きますので、2年生の中盤から専門教育が始まることになっていましたので、専門教育で聴覚障害の学生の授業支援をどうやったらいいかということの研修会を開催しました。

その後、年度的にはちょうど去年になりますが、20年4月に、今度はここに書いてある注意欠陥多動性症候群、俗にいうADHD、発達障害ですね。あるいはアスペルガーというものを併発したというか、両方の発達障害を持った学生が2名入ってきてまして、それと合わせて聴覚障害の学生が2名入学してきました。そのうち、発達障害の学生1名と聴覚障害の学生1名が、先ほどのJASSOの言い方でいうと「支援障害学生」の対象になって、我々のセンターでサポートすることになりました。

発達障害は聴覚障害とは全く別ですので、発達障害の学生に対してどのような授業保障、情報保障をしたらいいのかという話の研修会を行いました。これはさっとお話ししていきますが、こういう形でやっていったということです。

特に今年の2月には、ここに書いてありますが、先ほどの二川君がちょうど3年生になるということで、2年生の後半から実習が増えてきてまして、動物を実習するのです。そういうところで聴覚、耳が聞こえない学生さんに対してどのような実習、演習等でサポートをしたらいいかということで、先進校の先生に来ていただいて、いろいろなノウハウというか、サポートの方法をお聞きしました。

時間がありませんので、これが今までの経緯です。これについては写真を後で見てくださいるので、それを見ていただければいいと思います。簡単にお話しします。

さて、本学も受験を希望する方、あるいは実際に合格して入ってくる方が増えているわけですが、どのような受験、今回の一番のテーマかもしれませんが、受験から1年生の前期の終了まで大体どのような流れになっているか。この後、広島大学の山本先生からもお話があると思うのですが、広島大学と大体同じなのですが、まず皆さんが山口大学を受験したいとお考えになった場合、事前相談をしていただくようになっています。本人と親御さん、保護者に来ていただいて、その学部の先生、学生委員というのがいま

すので、その先生と相談してもらって、どんな障害で、大学として受験に際してどんなサポートが必要かということをいろいろ話し合います。それを受けて、全学的な障害学生修学支援委員会というのがありまして、そこで全学的に受験生に対してどのようなサポートというか、配慮するのか。配慮事項を話し合っ、本人にそれを通知しています。例えば別室受験であるとか、視覚障害の場合は拡大して問題を読んでいただくなどいろいろ配慮事項を検討します。そういう配慮事項に従って受験をしていただく。受験をした後で、晴れて合格した場合ですが、合格したらすぐに今度は保護者と学部、それから我々大学教育センターの人間が入って、合格後の相談会を開催することになっています。

そのときに、大学としてここまではサポートできるけれども、ここまではできませんということをごく程度話をします。ここはすみませんけれどもおたくのほうで、要するに、保護者の方、本人が努力をしてくださいということをはっきり言います。いくら基本方針があるといっても、山口大学としては広島大学さんのようにアクセシビリティセンターや障害学生を支援するセンターというのがありませんので、現実的にはできることが限られているわけです。山口大学ではここまで大学としてサポートできますけれども、ここはできませんということをごくお話しします。それで相互に支援の範囲を確認し合うのですね。

その後、入学する前ですが時間割を作ってください、そうしますとどの先生の授業を受けるかが事前にわかりますので、そこで本人が受講を希望している授業の担当教員を集めて、例えば「聴覚障害の学生が入ってくるので、こういう点を注意して授業を行なってください」という配慮事項というペーパー（これは広島大学からいただいたのですが）を作成し、それを研修会に参加した先生方にお渡しして研修会を実施しています。

授業が開始されると、情報保障であるとか、授業中のいろいろなサポートがうまくいっているかどうか、どんなことに問題があるのか、ということをごく授業担当者だけでなく、本人や保護者とも常に情報交換します。前期を終了して成績が出た時点で、本人、保護者、我々センター、それから学生支援センターという生活支援をやっている部署ですが、そういうものを交えて、授業、生活面に関する情報交換をやる。これが大体1つのサイ

クルで回っていく形になります。後期ではまた同じようなことを、ぐるぐる回していくという支援体制を取っています。

これが簡単にいうと支援組織です。山口大学の場合は広島大学さんのようにアクセシビリティセンターというセンター機能がありませんので、実はそのセンター的な機能を果たしているのが、ここに書いてある大学教育センターです。ここは司令塔と書いてありますが、ほとんど私がやっているのですが、私が中心的にコーディネーターという形で対応しています。一応、全学的な組織としては障害学生修学支援委員会という機構長（副学長）や各部局の課長、教育機構のセンター長などの方々が委員となった委員会があるのですが、はっきりいって、ここではいろいろ問題があったりすると話し合ったり議決したりする機関であって、実質的には我々の大学教育センターや共通教育係が日々の細かな支援や対応を行なっています。あとは学生支援センターが生活支援をやるわけです。保健管理センターは医療、健康面。それから、いろいろ悩みが出てきますので、そうすると教育相談所というのがありまして、そのカウンセラーが対応するようになっています。こういうところと連携を持って、ここに書いてある学部の先生方、それから障害学生本人、保護者、一般教員等をうまくコーディネートするという形で山口大学の支援組織は運営されています。

先ほど言いましたが、まだ我々は3年しかたっていませんが、こんな状況です。今の受け入れ状況ですが、聴覚障害が1名、昨年が2名、今年は残念ながらゼロでした。ゼロということは、受かった人がゼロということです。受験された人は5、6人いました。けれども、残念ながら今年は受験に合格しなかったということです。発達障害は去年2人入学しまして、今年はゼロでした。その他はありません。ですから、広島大学さんに比べると、現状として数はずっと少ないです。このような状況です。ただ、今言いましたように受験する方は5名程度毎年いまして、さらに大学の3年次に編入するという編入試験を受けている方も結構います。他大学にいるのだけれども山口大学の学部に編入したいと考えている障害学生も何人かいらっしゃいます。そういう学生の受験審査も先ほどの修学支援委員会という全学的な委員会でチェックします。

あと、どんなFD活動、要するに先生方の職能向上指導を山口大学がどういうことをやっているかということの、特に先生方の対応の話ですのでさっと聞いておいていただければいいと思うのですが、先ほど言ったように聴覚障害の学生が19年度に入ってきました。先ほどの二川君です。重度の聴覚障害の学生が入ってきましたので、我々は全く経験がありませんでしたので、どうやって対応したらいいのか非常に悩んだわけです。それで、筑波技術大学の白澤麻弓先生という非常に有名な先生をお招きして、どうやって難聴の方々にやったらいいのか。それから、聞こえなというのはどういう意味なのか。ノートテイク体験というのをやって、今ちょうどこちらでやられていますが、それをパソコンのノートテイクではなくて、手動でやったわけですが、そういうものを体験してみたり、それからパネルディスカッションをFD活動として実施しました。第2部が体験、第3部がパネルディスカッションでした。これが写真です。実際にこんなふうにやりました。真ん中にいる人がうちのセンター長なのですが、耳が聞こえないようにしておくのです。音楽を聞いていて、誰かがこっちの前で私が今喋っているように喋る。それをこの人は聞こえない状態にしておいて、両側の2人がノートテイクをやっているところです。だから、真ん中の人は、聞こえなというのはどういう意味なのか、ノートテイクされるということはどういう意味なのかということを経験しているところです。そういう体験をしていく。これをワークショップでやったわけです。

それから、この方は医学系なので、専門教育に行ったときに、特に実習のときにどのように対応したらいいかわからなかったもので、滋賀医科大学の埜田先生を招聘しました。滋賀医科大学では女子学生で医学部医学科の学生で、将来女医さんになろうとしている方がいらっちゃって、この先生がずっとサポートしてくれているというので、滋賀医科大学では専門教育の実習でどういうふうに対応しているのかということを知りたいためにこの先生に来ていただきました。この真ん中にいるのが埜田先生です。農学部の先生が、実習というのはどうやったらいいのか聞いています。これは非常にためになりました。実習のときに、耳の聞こえない学生に対してどうやるのか、この先生にいろいろノウハウを聞いたわけです。話が長くなりますのでここでは詳細なお話ししませんが、さまざま

まな参考になることがありまして、非常にいいことを聞いたという反響が大きかったです。この研修会は最初我々センターが主催してやったのですが、農学部ではその後、単独でもう一度この先生を呼んで研修会をやっています。

昨年度、発達障害の学生が入ってきたので、これに関しては保健管理センターのセンター長がお医者さんで、そのことにくわしいというので、保健管理センター長を中心に、まず、発達障害というのはどういうものなのか、ADHDとは何なのか、アスペルガーとはどのような障害なのかということ先生方と研修をやって、特に授業を担当する先生方に、この学生の対応の仕方というものを研修しました。この写真がその時の様子です。私がここにいますが、みんなで話をしています。ここに保健管理センターの先生がいて、発達障害とはどういう意味なのか研修しています。理学部に発達障害の学生が入ったので、理学部の先生がこちらにいます。こんな感じです。

時間が押して恐縮ですが、最後に、今の山口大学の課題と今後の展望について言います。先ほど言いましたように、共通教育といいまして、座学が中心、講義が中心の授業のときには今のところ聴覚障害についても発達障害についてもあまり大きな問題はない。ただ、問題は、2年生以降に専門教育の授業になって、特に実習等が大幅に増えてきたときに、これにどういうふうに大学側が対応していったらいいのかということをお我々も経験不足で、それこそ広島大学や先進校に聞いてみないとならないというので、いろいろな学校さんに聞いている段階です。ここが1つの課題かなと思います。

それから、やはりうちの場合、センターがありません。大学教育センターがそういう機能を補完している形になりますので、広島大学さんは非常にうらやましいのですが、本当はこういうセンター機能が必要かなと感じています。

それから、今のところ、ノートテイクのボランティアをやられている方がここにいらっしゃいますが、学生ボランティアの組織がまだできていません。というのは、二川君はノートテイクが今まで要らないと言っていたのです。FM補聴器があればいいからということをお言っていたのですが、実際、実習とか専門教育に行くと、やっぱりノートテイクが必要だと彼は言い始めまして、今その組織化というのが1つ大きな問題になって

いて、何とかしなくてはならないということで、2カ月ぐらい前に1回会議を開きましてどのように対応するか話し合いをやっていきます。そんなところで、ボランティアの組織化、何回も言って恐縮ですが、広島大学の場合は十分それができているのですが、まだそこら辺をうちは十分できていないというちょっとお粗末な状況なのですが、こんな状況になっています。これは JASSO の小越さんが言っていましたが、支援ネットワークの活用、参加というものが今後必要になってくるのではないかと考えております。

時間になりました。山口大学の取り組みを今回お話しさせていただきました。この後、いろいろ相談会があるそうなので、もう少し細かい話が聞きたければ、先生方でもいいし、学生の方でもいいし、親御さんでもいいですので、また聞いてください。

以上で終わります。

障害学生の入学前指導から入学後の修学 支援について

—山口大学の事例を中心に—

山口大学 小川 勤

1

本発表の内容

- これまでの取り組み
- 障害学生に対する受験から前期終了までの修学支援の流れ
- 現在の修学支援組織の構成
- 障害学生修学支援のためのFD活動について
- 現状の課題と今後の展望

2

はじめにー本学の方針ー

- 本学では、平成19年に「山口大学における修学に障害のある学生の支援に関する基本方針」が策定され、特別な支援を必要とする障害学生(以下、特別支援学生)への修学保障の取り組みが全学的にスタートした。
- この中で、特に大学教育センターは学生支援部と協力して障害のある学生(以下、特別支援学生)への「授業保障」に取り組んでいる。

3

はじめにー本学の方針ー

- チューターの先生との連携、学生・保護者との面談、所属学部・学科・共通教育授業担当教員を対象としたFD研修会の開催、学生からの日々の相談への対応など、学生が共通教育・専門教育の授業を十分に理解できるように学習環境の改善に取り組むはじめて今年で3年目となる。本発表では、その取り組みの概要と現在抱えている課題等について報告する。

4

＜山口大学における修学に障害のある学生の支援に関する基本方針＞

(第36回教育研究評議会 平成19年2月13日承認)

国立大学法人山口大学は、修学に障害のある学生の教育を受ける権利を尊重し、その学習活動の支援を目指して、次のような基本方針を定める。

1山口大学は、自主自立の精神、自己決定権、プライバシーの尊重の視点から、障害のある学生本人の意思を尊重して修学上の支援を行う。

2山口大学は、障害のある学生及び修学を支援する者と連携して、修学上の環境と支援体制を整備する。

3山口大学は、障害のある学生の支援を通して、学生サービスの充実、教育方法の改善など、大学の教育活動の向上を図る。

4山口大学は、障害者への理解を深めるために啓発活動を推進する。

5

これまでの取り組み

○平成19(2007)年 2月13日

・国立大学法人山口大学における修学に障害のある学生の支援に関する基本方針を制定

○平成19(2007)年1月~3月

・障害を持った学生の受験生が増加

○平成19(2007)年3月

・平成19年度山口大学共通教育「教務手帳」に、障害学生支援に関するページを掲載(基本方針及び障害学生修学支援事例集(愛媛大学ハンドブック参照)の掲載)

・広島大学障害学生支援のためのボランティア活動室(現アクセシビリティセンター)へ出向き、障害学生修学支援の方法について情報収集のための調査を実施。

6

これまでの取り組み

- 平成19(2007)年4月
 - ・重度の聴覚障害を持った学生が農学部獣医学科に入学(理系学部)に聴覚障害学生を受け入れたのは初めて)
 - ・障害学生が受講を希望している授業担当者に対して、聴覚障害学生に対する修学支援に関するFD研修会を学内で初めて開催した。
 - ・FD研修会の際に「授業中の配慮事項」を記載した文書を授業担当者に配布した。
- 平成19(2007)年8月
 - ・障害学生支援に関する講演会やワークショップ、パネルディスカッションの開催した。
- 平成20(2008)年2月
 - ・専門教育課程における聴覚障害学生の授業支援に関するFD研修会を実施。

7

これまでの取り組み

- 平成20(2008)年4月
 - ・注意欠陥多動性症候群(以下ADHD)とアスペルガー症候群の発達障害を持った学生が2名、聴覚障害学生が2名入学してきた。その内ADHDおよびアスペルガーの学生と聴覚障害の学生各1名については、大学教育センター・学生支援部は学生の所属学部と協力しながらサポートにあたっている。
- 平成20(2008)年4月
 - ・障害学生が受講を希望している授業担当者(前期)に対して、聴覚障害学生に対する修学支援に関するFD研修会を開催
 - ・FD研修会の際に「授業中の配慮事項(聴覚障害用)」を記載した文書を授業担当者に配布した。

8

これまでの取り組み

○平成20(2008)年9月

- ・前期の授業の受講状況や大学での生活について、保護者、障害者本人(発達障害)、大学教育センター、共通教育係、学生支援センターなどが一緒になって情報交換のための話し合いの会を開催した。
- ・障害学生が受講を希望している授業担当者(後期)に対して、障害学生に対する修学支援に関するFD研修会を実施。
- ・FD研修会の際に「授業中の配慮事項(発達障害用)」やADHDなどの発達障害の概要と対処方法を記載した資料を授業担当者に配布した。

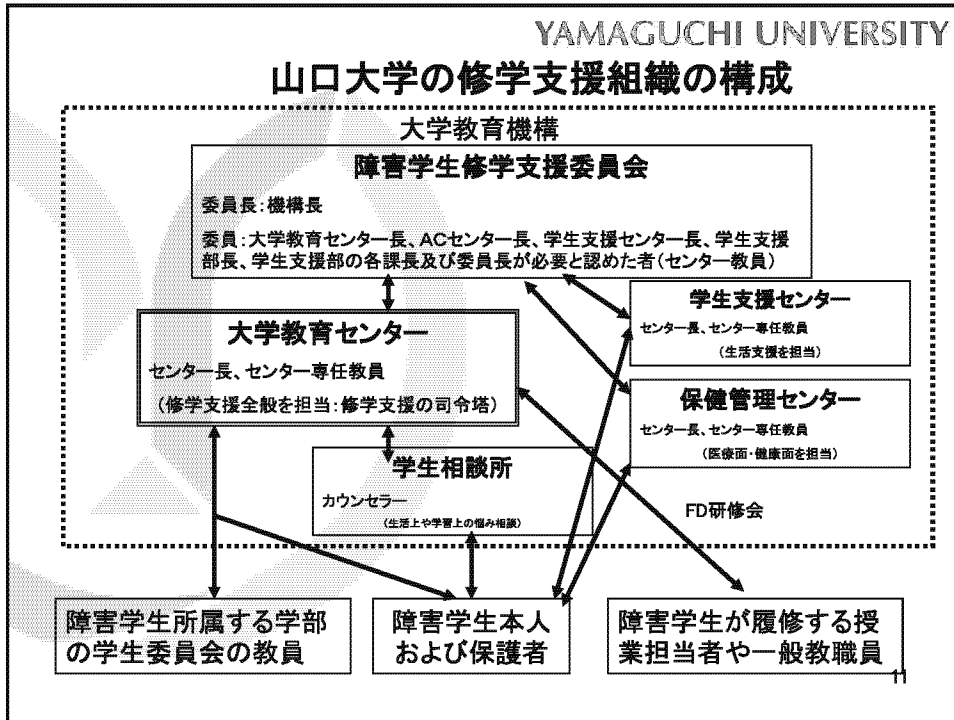
○平成21年(2009)年2月

- ・聴覚障害学生の授業特に実習関係の受講の課題について、所属学部と大学教育センター、学生支援センターが話し合った。

障害学生に対する受験から前期終了までの修学支援の流れ

- 1)受験希望者からの事前相談
- 2)障害学生修学支援委員会による検討・結果の通知
- 3)受験・合格発表
- 4)合格後相談会の開催
- 5)時間割の作成(3月末まで)
- 6)授業担当教員向けFD研修会の開催(4月初旬)
- 7)授業開始
- 8)授業期間中のサポート
- 9)前期終了
- 10)本人、保護者、大学教育センター、学生支援センターを交えて、授業・生活などに関する情報交換会の開催

山口大学の修学支援組織の構成



障害学生受け入れ状況

年度	19年度	20年度	21年度
聴覚障害	1名(農)	2名(理・経)	0名
発達障害	0名	2名(理)	0名
その他	0名	0名	0名

毎年、約5名程度の受験生がある。
3年次編入試験を受験する者もいる。

障害学生修学支援のためのFD活動について

○聴覚障害学生支援に関する講演会やワークショップ、パネルディスカッションの開催

- ・平成19(2007)年8月9日(木)実施
- ・講師に筑波技術大学の白澤麻弓准教授をお招きし、聴覚障害学生支援の全国的状況と個々の教員ができる配慮事項について講演していただくとともに、難聴・ノートテイク体験ワークショップとパネルディスカッションを実施。

・第1部 基調講演

演 題:『障害学生支援にはどのように取り組んでいくのか』

講演者:白澤 麻弓 准教授

(筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター)

13

障害学生修学支援のためのFD活動について

・第2部 体験研修

テーマ:難聴及びノートテイクについての体験

指 導:(愛媛大学ノートテイク学生)ほか

概 要:ノートテイクを携わった愛媛大学の学生の指導のもと、参加者や学生ボランティアが実際にノートの取り方などを体験します。

・第3部 パネルディスカッション

パネリスト:

白澤麻弓(准教授(筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター))

平尾智隆(講師 愛媛大学教育・学生支援機構学生支援センター)、

埜田和史(滋賀医科大学)、障害学生等

14



＜難聴・ノートテイク体験ワークショップの様子＞

15

障害学生修学支援のためのFD活動について

○専門教育課程における聴覚障害学生の授業支援に関するFD研修会を実施

- ・実施日：平成20(2008)年2月実施
- ・基調講演：講師：滋賀医科大学 埜田和史准教授)。
- ・内容：聴覚障害学生が専門課程に進学した際の授業支援や情報保障、実習の際の安全確保等について、滋賀医科大学でこれまでに実際に実践してきた事例紹介を交えて講演会および質疑応答が行われた。

16



専門教育課程における聴覚障害学生の授業支援に関するFD研修会の様子(講師:滋賀医科大学 埜田和史准教授)

17

障害学生修学支援のためのFD活動について

- 発達障害学生のための修学支援に関するFD研修会を実施。
- ・実施日:平成20(2008)年4月～平成21(2009)年4月までの間に3回開催
- ・対象者:発達障害学生が履修を希望している授業担当者及び理学部数理科学科教員
- ・内容:
 - (1)挨拶(当該研修会の趣旨) 大学教育センター長
 - (2)発達障害について 保健管理センター長
 - (3)発達障害学生に対する授業での対応について 大学教育センター専任教員
 - (4)質疑応答

18



発達障害学生のための修学支援に関するFD研修会の様子 19

現状の課題と今後の展望

- 今までの取組について、学生自身からも「ありがたい」「特に問題はない」「よく支援していただいているので特に問題は感じていません」という声が寄せられており、とりあえずは安堵している。
- 2年次以降は専門教育の授業(実習等を含む)が大幅に増加し、授業内容が高度になってくるため、実際に学生が授業についていけないケースも現れてきている。

現状の課題と今後の展望

■「修学支援センター」などのセンター機能の必要性

大学教育センターが関わることができるのは入り口の部分が大半であるが、専門教育において、学生自身や教員が直面する課題にも応えていけるよう、様々な事例やデータを収集し、共有していかなければならないと考えている。そのためにも全学規模での修学支援体制を整える必要がある。

■学生ボランティアの組織化

本学では現在、ノートテイクやPCノートテイクを必要とする学生はいない。しかし、今後様々な障害を持った学生を受け入れる可能性があることを考えると学生ボランティアの育成・活用はいずれ取り組まなければならない課題である。そのための組織化は急務である。²¹

現状の課題と今後の展望

■全国規模の特別支援学生への支援ネットワークへの参加とネットワークの活用

日本学生支援機構(<http://www.jasso.go.jp>)をはじめ様々な団体が特別支援学生への支援のネットワーク化を進めており、非常に情報を得やすくなっている。こうしたネットワークに参加し、障害学生を支援している全国の仲間で課題を共通しながら、今後、本学に入学してくる障害学生への支援をいかに充実させていくかが課題である。

今後も共通教育・専門教育の別なく、学習環境の整備・改善に向けて努力を重ねていきたい。

ご静聴ありがとうございました。

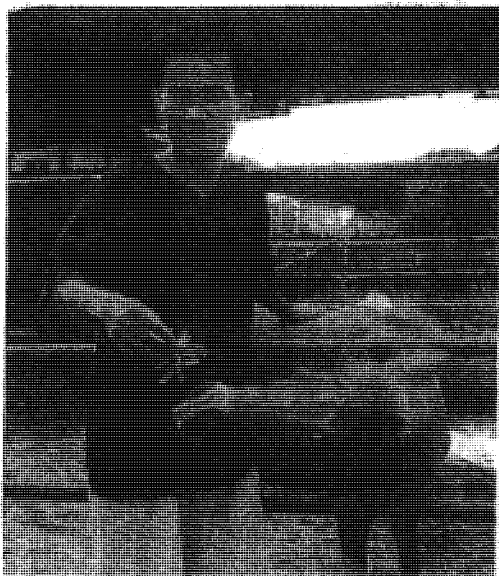
山大的
 理系で初

聴覚障害学生受け入れ

聴覚に障害を持つ山口市山門の二川雄一さん(20)が、四月から山口大農学部獣医学科で学んでいる。同大が理系の学部にも、聴覚障害者を受け入れたのは初めて。二川さんの入学を機に、講義を理解しやすくするためのさまざまな取り組みが始まっている。

二川さんは先天性の難聴。相手の口の動きが見え、唇がでぶ以内で状況であれば会話はできるが、雑音がある環境で特定の音を聴き取るのは難しい。

農学部 獣医学科 二川さんの入学機に
 講義を工夫、支援の輪



当番の馬の世話をする二川さん。「クラスメートたちの温かい支援もあり、大学生活は充実している」と語る(山口市の山口大農学部で)

小学校から高校まで普通校に通った。授業では先生にマイクを付けてもらい、二川さん力をしてきたという。

は内容が高度な上、講義の大半を口頭で行う。特に理系では落書きなどを使用する実験や臨床実習があり、危険を伴う。このため障害を持つ学生の受け入れには難色を示すことが多かった。

聴覚や視覚に障害を持つ人は医師や薬剤師、獣医師などになれないとした「欠格条項」が見直され、障害者が医療の仕事へ進む道が開かれた。障害があっても学生が高専教育を受けられるよう、大学が公的に支援する動きが、愛媛大や筑波大などで進んでいる。

山大は昨年、大学教育センター(岩部浩三センター長)が中心となり、こうした障害を持つ学生の受け入れを決定。多くの障害者が受験した。

唯一合格した二川さんに対し、手探りの中

の似通った専門用語の聞き分けに苦労する。専門用語のデータベースをパソコンに内蔵し、必要に応じてスクリーンに表示する仕組みなどが今後整備されるとありがたい」と言う。

大学 全体 教育改善にも一役

後期から解剖実習などが始まるが、教員は口の動きが見える透明なマスクを使用し、二川さんは白衣の中で目立つよう、色の付いた実習衣を着るなどの工夫をする。

二川さんは「特に薬品名や臓器名など、音

岩部センター長は「二川君にとって分かりやすい授業は、一般学生にも分かりやすいことが多かった。大学全体の教育改善にもつながり、今後できる限りの対策を取ってみたい」と語った。(佐野)